

1980年代日本ポピュラー音楽における<フランス>的なるもの
～大貫妙子を中心に～

安來茉美（関西大学大学院 社会学研究科メディア専攻 博士前期課程）

本研究は、1970年代後半から1980年代前半の日本のポピュラー音楽において<フランス>イメージがいかに受容され、いかなる役割を担っていたのかを、大貫妙子を中心に検討するものである。

日仏間の文化越境については、これまで主として文学やファッションを対象とした研究が蓄積されてきた。一方、ポピュラー音楽に関する研究も存在するものの、その多くは1960年代のイエイエやシャンソン、あるいは1980年代におけるワールド・ミュージックに焦点が置かれており、1980年代の日本のポピュラー音楽を対象とした検討は十分に行われていない。

本研究では、主に1970年代後半～1980年代前半の大貫に関するインタビュー記事、レビュー、広告写真から<フランス>関連の記述および視覚表象を抽出し、そのイメージの特質を分析する。さらに同時期の雑誌『BRUTUS』や『Olive』におけるフランス表象と比較することで、大貫の<フランス>イメージがどのような意味作用を担ったのかを考察する。

大貫が1980年代に発表した『ROMANTIQUE』（1980）、『AVVENTURE』（1981）、『Cliché』（1982）は「ヨーロッパ三部作」と称され、しばしばフランス的要素と結びつけられてきた。その受容には、雑誌メディアにおけるフランス紹介や「西武ゼン文化」に代表される当時の文化的消費の潮流が背景にあるのではないだろうか。

本研究は、大貫における<フランス>イメージが、主流ポップスとは異なる独自性や差異化を表象する記号として機能していた可能性を暫定的に示す。